



Laurentian International School

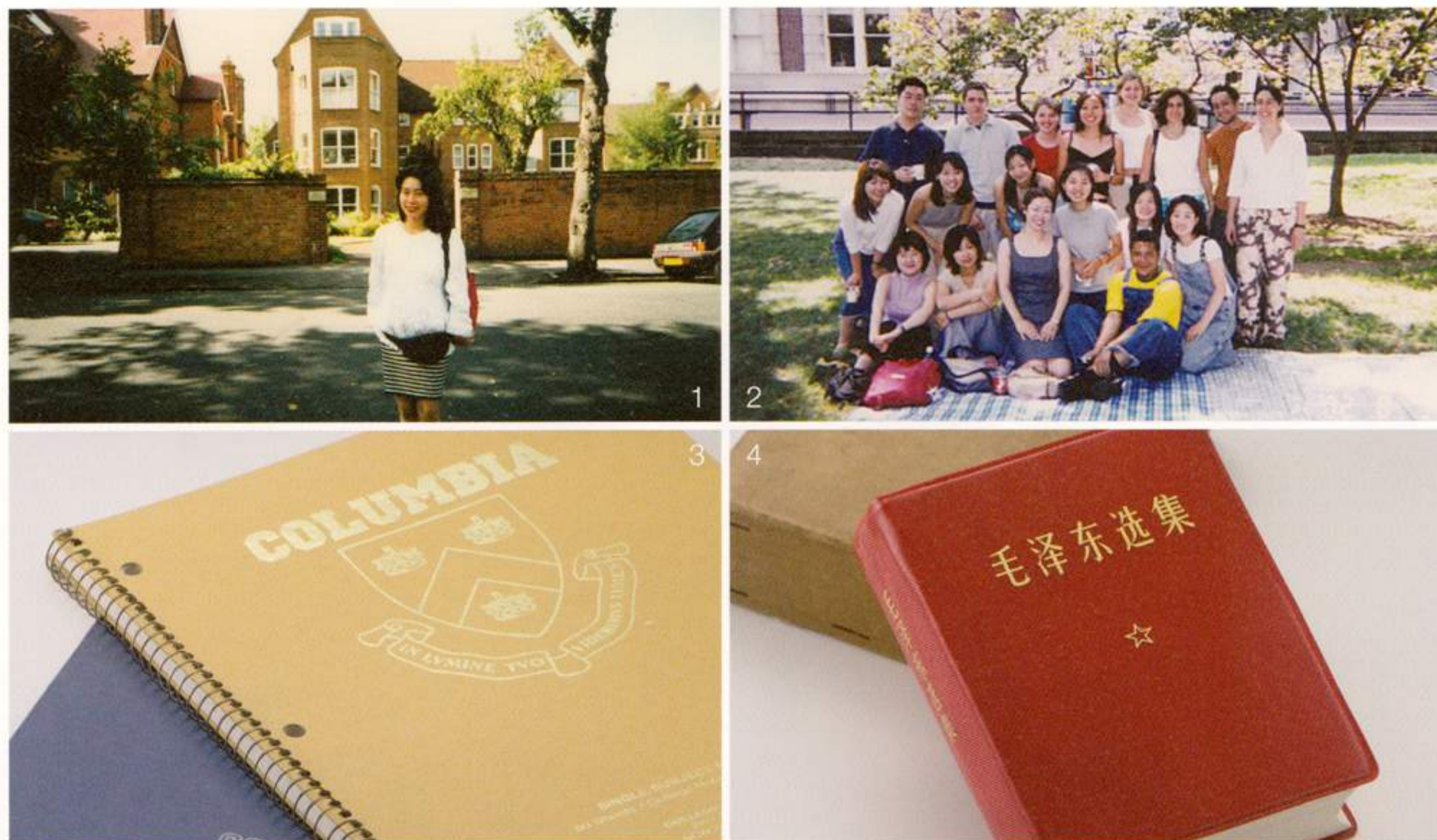
vision-05

欧米の教育環境に学ぶ 紳士・淑女の資質。

グローバル化が進む中、私たち日本人も世界各国の人々と的確にコミュニケーションし、交流を深めていくことが求められる現在。今の日本、そして日本人にとって、必要とされる教育環境とは。そのヒントが欧米の名門プライベートスクールにあるのではないだろうか。自己表現力、人としての礼儀、自国の文化や歴史、世界的な視点……。欧米では、社会的地位のある人々の多くが、幼少期から国際人としてのエリート教育を受けて育つ。しかし、残念なことに今の日本には、こうした教育環境がほとんどない。そこで今回は、日本流のプライベートスクールとして注目される「ローレンシャンスクール」をピックアップしてみた。この機会に、日本の教育環境、そして子育ての在り方について、考えてみてはどうだろう。

文：水野 桂宏・写真：二塚 一徹・資料提供：ローレンシャンスクール/
株式会社 奥井海生堂





留学経験で培った教育に対する理念を、子どもたちの未来のために。

「ローレンシヤンスクール」の根底に流れているもの。それは、欧米の名門プライベートスクールのコンセプト。その教育理念は、どこから生まれたのだろうか。大きな要因となったのは、中村和世さんが留学を通して感じ、経験したこと。それが「ローレンシヤンスクール」の骨格を形成したことは間違いない。「留学先では、自分がどういふ人間か、何を考えているのか、しっかりと自分自身を持っていることが大切であり、自国の文化や歴史を語れること。それが不可欠だと感じました」。海外で英語を話せることはもちろん大切だが、自分を語る、日本を語るができなければ、個人としての「私」が認めてもらえないという。南山女子部時代にドイツ語で語らせたシューベルトの『野ばら』を披露したことが、欧米社会での社交の扉を開ききっかけとなり、交友関係も広がったという。同時に、留学先で出会う多くの友だちが、幼少期からプライベートスクールでエリート教育を

受けていたことに気づかされたようだ。人と接する際の礼儀、自国の歴史や文化への理解、芸術への造詣、世界的な視点や知識、コミュニケーション能力等々、幼少期から学び、身につけることで、その子の可能性はどんどん広がっていく。こうした教育環境、そのためのプライベートスクールが日本にも必要ではないだろうか。彼女のその思いが今の「ローレンシヤンスクール」の原点となっている。「そのお子様は、将来どんな道に進みたいのか。進むべきなのか。それは、幼いお子様自身では判断できません。私たちの役割は、ご家族とともにお子様の将来を考え、その可能性を広げてあげること。そのための教育アドバイザーなのです」。1歳から18歳までの生徒が学んでいる「ローレンシヤンスクール」。その長い時間をかけ築き上げた信頼関係は、卒業後も家族ぐるみで続くことが多いという。その教育姿勢こそ、今の日本に欠けているものではないだろうか。

中村 和世

Kazuyo Nakamura

南山女子部卒。大学在学中、文部省（現文部科学省）の国費留学生の試験を受け、中国・上海市の復旦大学に留学。イギリス・オックスフォード、アメリカ・コロンビア大学にも留学の経験を持つ。卒業後は、上海で日本の都市銀行に勤務。その後、ニューヨークの財団でマネジメント業務に従事。現在、ローレンシヤンスクール Principal。



1. オックスフォード大学留学中に、皇太子妃雅子様も留学時に寄宿していたという宿舎の前で。
2. 留学時代の友人。今では各国で責任ある立場で活躍中。写真前列中央が中村校長。
3. コロンビア大学留学時代に使用していたノート。当時は思い出し、初心を忘れないよう残してある。
4. 中国留学時に使っていた「毛沢東語録」。

現在の中国を知る為には、その歴史や文化・思想を学ぶことも重要。



1



2

1. 南山小学校合格お祝い会として、志ら玉笑庵にて、親子で参加して行われたお茶事の様子。
2. 野菜本来の味を知るために開催された「春をいただく」授業の様子。
3. 「ききダシ」。昆布の種類によって味や色が異なっていることや、味覚の感性を養う。
4. 本物にふられる教育環境としてしつらえた茶室の歴史ある江戸中期の茶道具。
5. 合格した年に生徒がかいた書初めの書は、桐箱入りの掛け軸に。将来の、かけがえのない宝物になる。
6. 幼少期から伝統文化を身近に感じられる環境が大切。
7. 幼い頃からグローバルな視点を養うことが目的の教材。

『南山小学校、全員合格』へ導いた独自のオーダーメイドプログラム。

『南山大学附属小学校、全員合格』。毎年、高い合格実績を残している「ローレンシヤンスクール」。その特徴は、生徒一人ひとりとじっくり向き合い、その生徒の個性や能力を伸ばすためのプログラムをオーダーメイドしている点だ。もちろん、その家族とも時間をかけて話し合う。「祖父母や両親の職業、学歴、それぞれの家族には背景があります。それを理解したうえで、いっしょにお子様の将来を考えること

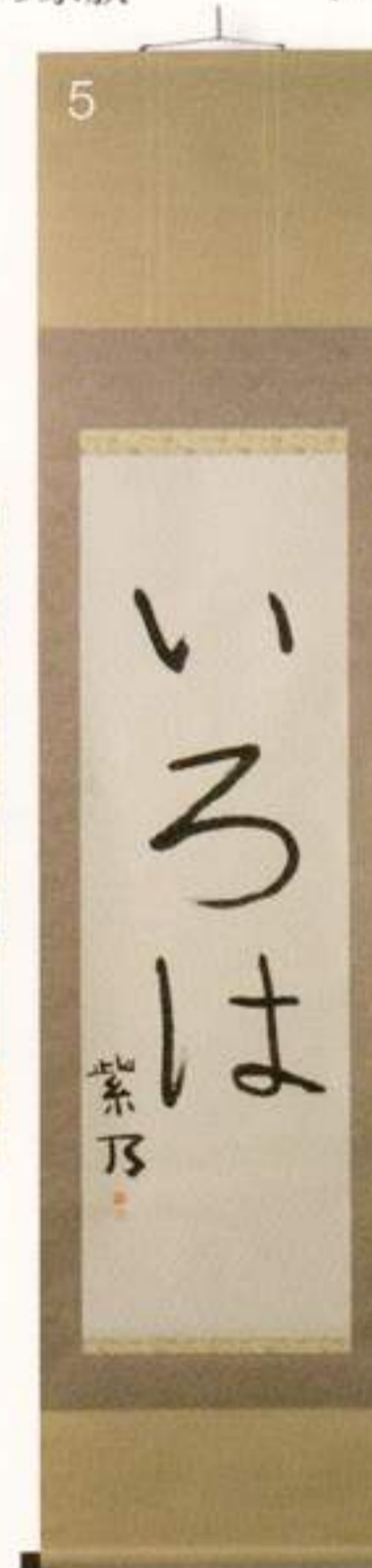
が大切です」。さらに『文化を知る、本物を知る』ための多彩な取り組みも特徴のひとつ。たとえば、徳川美術館研修、歌舞伎鑑賞会、漢詩の朗読会などの特別プログラムが用意されている。お茶やお花の作法なども教えているそうだ。「子どもは本物を見抜く目を持っています。教室で抹茶をたてる時も、本物の道具を使うようにしています」。絵画や器、美術品だけでなく、『食』もテーマのひとつ。



3



4



5



6



7

「春をいただく」というテーマでは、旬の春野菜を食しました。ほろ苦さを伴う、野苻、タラの芽など10種類以上の春野菜にも、思わずにっこり。野菜キライのお子様も、本物の味を知ることで食べられるようになります。この他にも昆布で出したダシの違いを味分ける「ききダシ」なども行っているそうだ。こうした枠にとられない数々のプログラム。こうした教育姿勢を通して伝えたいことは、子どもの身近にいる大人の責任の重さではないだろうか。つまり、教育環境とは生活環境そのもの。子どもは、身近な大人の話す

内容はもちろん、話し方、身振り、手振り、実にさまざまなものを吸収し、自分のものにするという。だからこそ、私たち大人がまず生活に向き合う姿勢を正すべきなのかもしれない。「教育とは、子どもの未来にたずさわることのできる素敵な仕事。これから子どもたちの成長を見守っていきたいと思っています」。「ローレンシヤンスクール」は、この7月から小学校1年生から4年生を対象にした『スーパーエリート教育専科』を新たに新校舎でスタートさせるという。ここから次代を担う子どもが一人でも多く巣立っていく日が待ち遠しい。